Tsukuba Psychological Research
2008, **35**, 27-40

大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちの分析

筑波大学大学院人間総合科学研究科　池田　幸恭

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　佐藤　有耕

Awareness of aging in one's parents within undergraduate students

Yukitaka Ikeda and Yuhkou Satoh (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to investigate awareness of aging in one's parents within undergraduate students. One-hundred-and-sixty-two undergraduate students responded to a questionnaire consisting of 55 items relating to feelings about the aging of one's own parents. The results are as follows: (1) Factor analysis extracted the factors of "sadness for aging parents", "caring about aging parents", "apprehension towards burden of aging parents", "self-growth", "recognition of parental aging as natural" and "intention to be independent from aging parents". Moreover, "anxiety for mother's old age" was extracted as a feeling about maternal aging. (2) The following clusters were categorized: "accepting parents' aging", "disturbed by parents' aging" and "indifference to parents' aging". The cluster of "concerned about mother's aging" was added with regard to mothers. (3) More females were concerned about their mother's aging than males, and males were accepting of this than females. These findings suggest that parental aging is indifferent for some adolescents, that females in particular are concerned about their mother's aging, but that parental aging leads to building relations with their parents while they are accepting or disturbed by their parents' aging.

Key words: parental aging, parent-child relations, adolescence

問　題

青年にとって親が老いることはどのような意味をもっているのか。久世・平石（1992），平石（1995）は，青年と両親との関係は相互調整的な関係であるとし，親子の共変関係を指摘している。子が青年期を生きるとき，親は中年期を生きていることが多いと考えられる。落合（1995）も，子の青年期の危機は，親の中年期の危機と重なることを論じている。若本・無藤（2006）は，中高年期における老いの連続性ついて論じ，「老いは老年期に限定された経験ではないことが中年期研究において指摘されている」と述べる。岡本（2002）も，中年の人々が体験しやすい身体的変化として，「体力の衰え・老化・寿命の限界の自覚」などが生じることを指摘している。このように，中年期にある親は自らの老いに向き合い始めているといえる。久世・平石（1992），平石（1995）による親子の共変関係という指摘を踏まえると，親が中年期に自らの老いに向き合い始めると共に，青年も発達していくと考えられる。

従来，親の老いの問題は，中年期にある子と老年期にある親について論じられることが多かった。例えば，国谷（1989）は，向老期には「それまで表出へのブレーキとなっていた親の権威が老齢化によって薄れ，ためこまれた『うらみ』が表現され，年寄りいじめが始まったり，嫁の姑への仕返しがおこなわれたり，というようなことが多くなる」と述べている。長田（2005）は，中年期にある子には，老親

の介護や看取りをめぐる問題が生じると論じている。池上（1997）は，老母の中に自分の老いを発見し，自分の老いへの恐怖と出会った女性の事例を紹介している。Rabin, Bressler & Prager（1993）は，家族システムにおける個人的権威を獲得できていない人ほど，年老いた親の世話に対して心理的負担を強く感じることを報告している。Rabin et al.（1993）の研究結果について，野末（1996）は，家族システムにおける個人的権威を獲得できていない人は「心理的に子供であるために，親が老いつつありいずれは永遠の別れがやってくるという現実を受け入れ難く，できれば目を背けたいという気持ち」や「子供の頃からの憎しみや恨みが未解決であるのに，一方で親の世話もしなければならないという，非常に強烈な葛藤」などを抱いているためではないかと考察している。そして，野末（1996）は，「老いていく親は，自分のこれまでの生き方や，人間としての弱さや苦しさや悲しさを，自分の子供に理解され受容されることによって，初めて自分自身の人生を受容し，自分を一人の人間として受容できるのかもしれない」と述べている。

その一方で，青年期に親の老いを認知することが親子関係の変化につながることも指摘されている。西平（1990）は，心理的離乳を第一次，第二次，第三次という段階に分けている。西平（1990）は，第二次心理的離乳の特徴として，両親の高齢化も手伝って，親密感を増し，感謝の気持ちも加味されることを論じている。先に述べた落合（1995）は，親が老いる姿を見た時，「子は親を自分を養ってくれる者と考えるばかりではなく，逆に，親とは，物理的にも精神的にも養ってもらう存在でもあるというようなことを自覚するようになる」と指摘する。そして，「このような自覚を持ったときに心理的離乳が遂げられていくのではないだろうか」と続けている。青年期は親子関係が大きく変化する時期であり，その変化に親の老いを認知することは関係すると予想される。したがって，親の老いの認知について検討することは，青年が自分自身の親子関係の変化を理解することに貢献できるという意義があると考えられる。

本研究では，「親の老いの認知」を，「親は年をとったと思うこと」と定義して研究を進める。これは，日本国語大辞典（2001），広辞苑（1998），新明解国語辞典（2005）における「老い」と「老いる」に関する記述を参考に定義づけしたものである。また，本研究では，青年期の中でも親の老いを認知することが多いと考えられる青年期後期にある大学生に焦点を当てる。さらに，本研究では，男女差も考慮して研究を進める。ここでは，息子と娘という子の性別だけではなく，父親と母親という親の性別も考慮する。西田（2000）は，「現代社会では，ほとんどの家庭において母親が養育の主たる担い手」であり，「青年はたいていの場合，父親よりも母親と日常的に接する機会が多い」と述べている。塩田（2000）は，密着した「母－娘」関係という母と娘の歪んだ関係の例を挙げ，密着した関係であるがゆえに「介護者－被介護者」の関係が固定化し変化も起こりにくいとし，介護の担い手になりやすい娘による老親介護の課題を指摘している。そして，塩田（2000）は，母と娘の開かれた関係の必要性を論じている。河合（1980）は，「母・娘結合の心性は，もっとも自然で根源的なもの」であると論じている。青年期の親子関係においても，母と娘の親密な関係は，岡本・上地（1999）や小高（2000）の研究などで報告されている。その一方で，大野（1998）は，父親と母親の違いについて，生物学的な性差として暗黙のうちに納得されてきた事柄を，個人差という観点から理解する必要性を主張している。したがって，本研究では，息子と娘，そして父親と母親という男女差がみられた場合には，生物学的な性のみならず，社会化の過程で身につけたジェンダーや，個人の属性による影響の可能性も考えるという立場から研究を進める。

本研究では，大学生は親の老いを認知したときにどのような気持ちになるのかという「親の老いの認知によって生じる気持ち」を検討する。親の老いを認知することで生じてくる様ざまな気持ちに，大学生にとっての親の老いがもつ意味あいが反映されていると考えたためである。さらに，大学生が実際に親の老いを認知するときには，親の老いの認知によって生じる様ざまな気持ちを別々に感じているというよりも，それぞれの気持ちが合わさった状態にあるといえる。そこで，本研究では，親の老いの認知によって生じる気持ちの組み合わせからみた状態像についても検討する。

目　的

本研究の目的は，大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちについて明らかにすることである。具体的には，次の3つの目的に沿って研究を進める。

1．大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちを抽出する。

2．親の老いの認知によって生じる気持ちの組み合わせからみた状態像を明らかにする。

3．親の老いの認知によって生じる気持ちの男女差からみた特徴を明らかにする。

方　法

親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる項目の設定

親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる項目は，2005年6月に収集した自由記述をもとに作成した。このときの回答者は，茨城県内の大学生75名（男性45名，女性30名）であった。調査回答者の平均年齢は，20.45歳（*SD* =1.29）であった。まず，“あなたは，母親が年をとったと思いますか。”という質問に，「まったく思わない」，「たまに思う」，「時々思う」，「いつも思う」の4件法で回答を求めた。父親についても，母親と同様の形式で質問を行なった。続けて，「まったく思わない」と回答した回答者を除き，“親が年をとったと思うとき，どのような気持ちを感じたり，どのようなことを考えたりしますか。”という質問に，「[親・母親・父親]が年をとったと思うとき＿」という未完成の文章を呈示し，回答を求めた。「親」，「母親」，「父親」のいずれかに○をつけて回答してもらった。なお，母親が年をとったと「まったく思わない」と回答した大学生は75名中13名（17.3%）で，父親が年をとったと「まったく思わない」と回答した大学生は72名中10名（13.9%）であった。加えて，“親が年をとるということに関して思うことを自由にお書きください。”という教示のもと自由記述を収集した。

上記の手続きで得られた記述をすべてあわせて，親の老いの認知によって生じる気持ちに関する記述が計196件収集された。収集された記述を，著者と心理学を専攻する大学生3名の計4名で分類，整理し，質問項目を作成した。各項目が大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる項目として妥当であるかどうかについて，心理学を専攻する大学院生7名による検討を行った。その検討結果をもとに，カテゴリーを再整理した。その結果，「S）自分について生じる気持ち」，「P）老いた親について生じる気持ち」，「A）親の老いについて生じる気持ち」という3カテゴリーに大きくまとめられた。各カテゴリーには，それぞれ次のグループが含まれていた（Table 1）。「S）自分について生じる気持ち」には，「Sa）自分の成長に気づくきっかけ」，「Sb）自立したいという気持ち」，「Sc）自分の将来に関する悩み」が含まれた。「P）老いた親について生じる気持ち」には，「Pa）親を大切にしたいという気持ち」，「Pb）親の将来に関する心配」が含まれた。「A）親の老いについて生じる気持ち」には，「Aa）親の老いは自然なことだという気持ち」，「Ab）親の老いに対する寂しさ」，「Ac）親の老いの拒否」が含まれた。以上の計8グループに各6－7項目を用意し，親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目を設定した。

Table 1　親の老いの認知によって生じる気持ちのカテゴリーに含まれるグループの整理

S）自分について生じる気持ち	
	Sa）自分の成長に気づくきっかけ
	Sb）自立したいという気持ち
	Sc）自分の将来に関する悩み
P）老いた親について生じる気持ち	
	Pa）親を大切にしたいという気持ち
	Pb）親の将来に関する心配
A）親の老いについて生じる気持ち	
	Aa）親の老いは自然なことだという気持ち
	Ab）親の老いに対する寂しさ
	Ac）親の老いの拒否

調査回答者

回答を分析した調査回答者は，茨城県内の大学生162名（男性79名，女性82名，不明1名）であった。平均年齢は，20.21歳（*SD* =1.29）であった。

調査時期

2005年9月に，質問紙調査を実施した。

調査内容

（1）親の老いを認知している程度を尋ねる1項目

親の老いを認知している程度を，母親と父親それぞれについて尋ねた。具体的には，“あなたは，母親は年をとったと思いますか”という質問に，「まったく思わない」，「どちらかといえば思う」，「やや思う」，「とても思う」の4件法で回答を求めた。父親の老いを認知している程度についても同様の形式で回答を求めた。

（2）親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目

（1）の質問で「まったく思わない」と回答した調査回答者を除いて，親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目に回答を求めた。まず，“あなたが，「母親は年をとった」と思うときのことを思い浮かべて下さい。そのとき，あなたはどのような気持ちになりますか。”という教示のもと，「まったくあてはまらない（1点）」，「あまりあてはまらない（2点）」，「どちらともいえない（3点）」，「ややあてはまる（4点）」，「非常にあてはまる（5点）」までの5件法で回答を求め，（　）内に示した

得点を付与した。続いて，父親の老いの認知によって生じる気持ちについても同様の形式で回答を求めた。

分析手続き

1．親の老いの認知によって生じる気持ちを抽出するために，次の手続きで分析を行った。（1）親の老いを認知している程度と性別によるクロス集計を母親と父親それぞれで行ない，親の老いを認知している大学生の割合を確認した。（2）親は年をとったと「まったく思わない」と回答した大学生を除き，親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目への回答に，最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。固有値1以上の因子数から順次因子数を減らし，各因子に単独で.40以上の負荷量を示す項目が3つ以上あることを基準に，できるだけ多くの因子を抽出した。分析は，母親と父親に分けて行った。

2．親の老いの認知によって生じる気持ちの組み合わせからみた状態像を明らかにするために，次の手続きで分析を行った。（1）抽出された各因子に単独で.40以上の負荷量を示した質問項目のみを用いて平均得点を算出し，それを各因子に対応する得点とした。（2）各得点についてα係数を求め，それぞれの内的整合性を確認した。（3）算出された各得点を投入変数としたk平均法によるクラスター分析を行い，調査回答者を分類した。分析は，母親と父親に分けて行った。（4）各クラスターの解釈を行なうために，分類されたクラスター群を独立変数に，投入変数と親の老いを認知している程度とを従属変数にした分散分析を行った。主効果が有意であった場合には，Tukey の HSD 法による多重比較（5％水準）を行なった。（5）母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像と父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像によるχ^2検定を行ない，双方の人数比を確かめた。

3．親の老いの認知によって生じる気持ちの男女差からみた特徴を明らかにするために，次の手続きで分析を行った。（1）親の老いを認知している程度について，子である大学生の性別（男性・女性）と親の性別（父親・母親）を要因とした分散分析を行った。（2）抽出された親の老いの認知によって生じる気持ちについて，性別（男性・女性）を要因としたt検定を行なった。（3）親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像と性別（男性・女性）によるχ^2検定を行なった。分析は，母親と父親に分けて行った。

なお，分析に用いた統計パッケージは，SPSS15.0J for Windows であった。

結　果

1．大学生における親の老い認知によって生じる気持ちの抽出

初めに，親の老いを認知している程度と性別によるクロス集計を行った。親の老いを認知している程度に「まったく思わない」と回答した大学生は，親の老いを認知していないと判断した。その結果，162名中151名（93.2％）が母親の老いを認知していた（Table 2）。父親については，欠損値の問題から10名を除いた結果，152名中142名（93.4％）が父親の老いを認知していた（Table 3）。

続いて，親の老いを認知していた大学生について，親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目への回答に，最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。母親の老いの認知によって生じる気持ちは，固有値1以上の12因子から順次因子数を減らした結果，7因子解を最適解として採択した。7因子解の因子パターンを Table 4 に示す。このとき7因子によって説明可能な分散の総和の割合は，50.1％であった。父親の老いの認知によって生じる気持ちは，固有値1以上の12因子から順次因子数を減らした結果，6因子解を最適解として採択した。6因子解の因子パターンを Table 5 に示す。このとき6因子によって説明可能な分散の総和の割合は，54.4％であった。

母親の老いの認知によって生じる気持ちについて抽出された各因子は，以下のように解釈された。

第1因子に高い負荷量を示した項目の多くは，「Ab）親の老いに対する寂しさ」と「Ac）親の老いの拒否」として作成された項目であった。代表項目には，「もの悲しい気持ちになる（.93）」，「憂うつな気持ちになる（.86）」などが挙げられる。この因子は，母親が年をとったことに悲哀を感じている気持ちであると考えられる。そのため，この第1因子は，「母親の老いへの悲哀」と解釈された。

第2因子に高い負荷量を示した項目の多くは，「Pa）親を大切にしたいという気持ち」と「Pb）親の将来に関する心配」として作成された項目であった。代表項目には，「母親を大切にしようと思う（.86）」，「母親にはいつまでも健康でいてほしいと思う（.82）」などが挙げられる。この因子は，年をとった母親をいたわろうとしている気持ちであると考えられる。そのため，この第2因子は，「老いた母親へのいたわり」と解釈された。

第3因子に高い負荷量を示した項目の多くは，「Ac）親の老いの拒否」と「Sc）自分の将来に関する悩み」として作成された項目であった。代表項目

Table 2　母親の老いを認知している割合

	まったく思わない	どちらかといえば思う	やや思う	とても思う	合計
男性	4 (5.1%)	18 (22.8%)	41 (51.9%)	16 (20.3%)	79 (100.0%)
女性	7 (8.5%)	20 (24.3%)	43 (52.4%)	12 (14.6%)	82 (100.0%)
全体	11 (6.8%)	39 (24.1%)	84 (51.9%)	28 (17.3%)	162 (100.0%)

注1：数字の上段は人数，下段は（性別での人数比）である。
注2：性別が不明の回答者1名の回答は，「どちらかといえば思う」であった。

Table 3　父親の老いを認知している割合

	まったく思わない	どちらかといえば思う	やや思う	とても思う	合計
男性	7 (9.2%)	15 (19.7%)	28 (36.8%)	26 (34.2%)	76 (100.0%)
女性	3 (4.0%)	17 (22.7%)	35 (46.7%)	20 (26.7%)	75 (100.0%)
全体	10 (6.6%)	32 (21.1%)	64 (42.1%)	46 (30.3%)	152 (100.0%)

注1：数字の上段は人数，下段は（性別での人数比）である。
注2：性別が不明の回答者1名の回答は，「やや思う」であった。

には，「母親のことが重荷になると思う（.62)」，「母親が年をとったことで私に迷惑をかけてほしくない（.61)」などが挙げられる。この因子は，母親が年をとったことで自分の今後の生活に負担が生じることを懸念している気持ちであると考えられる。そのため，この第3因子は，「母親の老いがもたらす負担への懸念」と解釈された。

第4因子に.40以上の高い負荷量を示した項目のほとんどは，「Sa）自分の成長に気づくきっかけ」として作成された項目であった。代表項目には，「自分が大人になったと感じる（.89)」，「自分が成長したと感じる（.84)」などが挙げられる。この因子は，母親が年をとったと思うことで自分自身の成長を実感している気持ちであると考えられる。そのため，この第4因子は，「母親の老いにともなう自己成長感」と解釈された。

第5因子に高い負荷量を示した項目の多くは，「Pb）親の将来に関する心配」と「Sc）自分の将来に関する悩み」として作成された項目であった。代表項目には，「母親の老後の経済的な心配をする（.70)」，「母親の老後の生活が心配になる（.69)」などが挙げられる。この因子は，母親の老後の生活を心配している気持ちであると考えられる。そのため，この第5因子は，「母親の老後の生活の心配」と解釈された。

第6因子に.40以上の高い負荷量を示した項目は，すべて「Aa）親の老いは自然なことだという気持ち」として作成された項目であった。代表項目には，「母親が年をとることは自然なことだと思う（.80)」，「母親が年をとるということは当たり前のことだと思う（.78)」などが挙げられる。この因子は，母親が年をとることを自然なこととして認めている気持ちであると考えられる。そのため，この第6因子は，「母親の老いの自然視」と解釈された。

第7因子に高い負荷量を示した項目の多くは，「Sb）自立したいという気持ち」として作成された項目であった。この因子に.40以上の負荷量を示した項目は，「母親に甘えないようにしようと思う（.90)」，「母親に頼らないようにしようと思う（.71)」，「いつまでも母親がいるわけではないと感じる（.40)」という3項目であった。この因子は，年をとった母親に甘えるばかりではなく，母親から自立していこうとしている気持ちであると考えられる。そのため，この第7因子は，「老いた母親からの自立志向」と解釈された。

父親の老いの認知によって生じる気持ちについて

Table 4　大学生における母親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目のプロマックス回転後の因子パターン行列

		f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	h^2	平均値	*SD*
m-f1	**母親の老いへの悲哀**（α＝.95）										
母47Ab5	もの悲しい気持ちになる	**93**	−15	−14	03	02	06	01	77	2.58	1.23
母48Ab6	憂うつな気持ちになる	**86**	−12	02	−08	−03	04	02	69	2.00	1.11
母33Ab1	悲しい気持ちになる	**85**	10	09	−07	−17	03	06	69	2.62	1.19
母44Ab4	切なさを感じる	**84**	−07	−05	15	05	05	−08	71	2.81	1.30
母34Ac4	母親が年をとることに抵抗を感じる	**81**	02	02	−09	−02	−13	08	74	2.25	1.01
母35Ab3	気分が落ち込む	**80**	−02	06	−09	05	−03	−03	72	2.07	1.10
母37Ab2	寂しさを感じる	**78**	00	04	09	11	02	−05	70	2.91	1.23
母7Ac1	母親が年をとることがいやだと思う	**75**	08	02	−03	01	01	−06	60	2.66	1.25
母8Ac3	母親が年をとることについて考えたくない	**72**	10	16	−03	02	01	−09	63	2.36	1.15
母4Ac2	母親が年をとったことを認めたくないと思う	**52**	13	−02	−07	01	−23	09	44	2.44	1.20
母9Aa3	母親が年をとることは気にすることではないと思う	−36	−07	−03	−03	−11	19	09	29	3.38	1.18
m-f2	**老いた母親へのいたわり**（α＝.89）										
母32Pa4	母親を大切にしようと思う	02	**86**	−04	−04	00	06	−02	77	4.46	0.77
母19Pb3	母親にはいつまでも健康でいてほしいと思う	00	**82**	20	−09	−05	05	−13	52	4.76	0.57
母17Pa3	母親に感謝の気持ちを持ちたいと思う	−01	**82**	−03	09	−12	−01	00	67	4.32	0.80
母22Pa1	母親に優しくしようと思う	−02	**81**	−01	02	11	−05	06	75	4.26	0.86
母21Sb3	母親に迷惑をかけないようにしようと思う	06	**64**	21	03	−15	15	33	56	4.25	0.81
母31Pa5	母親を支えたいと思う	−12	**55**	−30	−06	26	−06	02	64	4.19	0.80
母23Pa7	母親に楽をさせてあげたいと思う	−04	**54**	−14	−14	24	10	08	54	4.32	0.82
母1Pa6	母親孝行しようと思う	09	**52**	−31	10	−07	−23	06	53	4.22	0.85
母36Pb6	今後の母親の健康を心配する	14	**43**	−06	10	30	08	−12	48	4.22	0.80
母20Pb4	母親にはいつまでも若々しくいてほしいと思う	27	**41**	19	16	−01	00	−12	31	3.58	1.06
母6Aa6	母親が年をとっても母親であることにかわりはないと思う	00	39	−19	05	−12	07	−13	25	4.68	0.65
m-f3	**母親の老いがもたらす負担への懸念**（α＝.78）										
母24Ac7	母親のことが重荷になると思う	11	−18	**62**	10	17	16	01	51	1.91	0.96
母42Ac6	母親が年をとったことで私に迷惑をかけてほしくない	−14	−18	**61**	33	08	08	−02	49	1.86	0.97
母54Ac5	母親が年をとることが厄介なことだと感じる	26	−20	**60**	07	16	09	−04	59	1.71	0.90
母14Sc6	母親からの経済的な援助が期待できなくなることを心配する	12	05	**56**	01	−03	−05	25	37	2.07	1.05
母51Sc2	私の将来に不安を感じる	−04	12	**51**	10	34	−12	04	38	2.28	1.21
母5Sc5	母親が年をとっていくことで私のしたいことができないのではないかと感じる	24	−03	**45**	−10	14	−12	05	43	1.76	0.94
m-f4	**母親の老いにともなう自己成長感**（α＝.72）										
母38Sa2	自分が大人になったと感じる	−05	02	05	**89**	−22	−02	−06	71	3.31	1.10
母40Sa5	自分が成長したと感じる	−14	03	07	**84**	−17	−03	−23	66	3.15	1.12
母39Sb2	自分がしっかりしなくてはいけないと思う	07	20	02	**48**	08	17	08	49	4.05	0.84
母55Sa4	私も年をとったと感じる	00	17	13	**47**	−05	−15	07	25	3.16	1.29
母49Sa3	私が母親の立場に近づいていると感じる	07	−14	05	**42**	09	−07	04	19	2.30	1.23
母53Sa6	私はもう子供ではないと感じる	07	−18	−16	39	29	07	17	41	3.82	0.99
母52Sc1	私の将来のことを考えなければならないと思う	−07	19	18	37	37	−05	13	48	3.68	1.16
母50Sa7	私と母親が対等な関係であると感じる	−09	−09	19	30	10	−12	16	16	2.43	1.18
m-f5	**母親の老後の生活の心配**（α＝.75）										
母28Pb2	母親の老後の経済的な心配をする	−06	−06	36	−18	**70**	04	16	61	2.65	1.20
母29Pb1	母親の老後の生活が心配になる	08	03	13	04	**69**	01	−06	55	3.32	1.13
母27Sc7	母親の老後の金銭面について，私が負担しなければならないのかと心配する	−23	−02	**54**	−13	**65**	02	−05	57	2.25	1.11
母26Pb7	母親の体力が衰えていくのではないかと心配する	27	04	04	−07	**48**	03	03	41	3.60	1.05
母25Sc4	母親のそばで就職しようかどうか悩む	−02	32	15	−03	**46**	−09	−23	35	2.66	1.29
母15Pb5	母親が老後をどのように過ごすか心配になる	20	05	04	−02	**45**	06	−03	32	3.60	1.08
母45Pa2	なるべく母親と一緒にいようと思う	18	34	−18	03	34	−04	−21	45	3.03	1.09
m-f6	**母親の老いの自然視**（α＝.76）										
母11Aa1	母親が年をとることは自然なことだと思う	−04	11	02	−19	−09	**80**	00	65	4.64	0.53
母13Aa4	母親が年をとるということは当たり前のことだと思う	−11	−03	−02	01	03	**78**	−11	62	4.60	0.54
母10Aa2	母親が年をとることは仕方がないことだと思う	01	−04	10	−16	12	**65**	−10	33	4.30	0.84
母30Aa5	母親も人間なので年をとるものだと思う	00	08	10	12	−15	**54**	08	39	4.51	0.66
母12Aa7	母親が年をとることを受けとめていこうと思う	−11	−03	−14	05	21	**47**	−02	36	4.31	0.73
m-f7	**老いた母親からの自立志向**（α＝.75）										
母2Sb7	母親に甘えないようにしようと思う	−07	−06	08	−02	−06	−14	**90**	68	3.52	1.10
母18Sb5	母親に頼らないようにしようと思う	−08	11	21	−13	−05	03	**71**	51	3.72	1.01
母3Sc3	いつまでも母親がいるわけではないと感じる	28	−22	−01	17	09	00	**40**	30	3.50	1.19
母43Sb4	自分の身の回りのことは自分でしようと思う	07	23	−17	05	−07	27	34	46	4.25	0.77
母46Sb1	早く経済的に自立しようと思う	05	08	−04	21	18	09	31	36	4.13	1.06
母41Sb6	自分でできることは母親にしてもらわず，自分でしようと思う	−11	25	−18	00	13	04	30	37	4.39	0.74
母16Sa1	母親と子ではなく，ひとりの人間として付き合おうと思う	−16	−04	12	14	19	−12	20	12	2.64	1.17

因子間相関		f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7
m-f1	母親の老いへの悲哀	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7
m-f2	老いた母親へのいたわり	18						
m-f3	母親の老いがもたらす負担への懸念	19	−41					
m-f4	母親の老いにともなう自己成長感	00	26	−16				
m-f5	母親の老後の生活の心配	37	34	−04	25			
m-f6	母親の老いの自然視	−34	18	−24	28	02		
m-f7	老いた母親からの自立志向	−03	24	−12	25	31	39	

注1：項目番号につけられているアルファベットは，類似の内容を整理する段階でつけられたものである。
注2：因子負荷量と共通性（h^2），因子間相関の小数点は省略した。枠で囲まれた因子負荷量は，各因子に対して，.40以上の負荷を示したものである。
注3：α係数は，各因子に単独で.40以上の負荷量を示した項目のみを用いて算出した。用いた項目の項目番号を枠で囲んだ。
注4：151名の「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5件法による回答について分析した。

Table 5　大学生における父親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目のプロマックス回転後の因子パターン行列

		f1	f2	f3	f4	f5	f6	h^2	平均値	SD
f-f1	**父親の老いへの悲哀**（α＝.95）									
父22Ab1	悲しい気持ちになる	**99**	−01	−09	02	03	−04	88	2.11	1.17
父21Ab3	気分が落ち込む	**94**	02	−03	−09	04	03	85	2.02	1.09
父19Ab2	寂しさを感じる	**88**	04	−06	02	00	02	74	2.41	1.20
父9Ab5	もの悲しい気持ちになる	**85**	−08	03	11	04	−11	72	2.29	1.22
父51Ac1	父親が年をとることがいやだと思う	**85**	−03	−01	00	05	−02	67	2.32	1.18
父12Ab4	切なさを感じる	**83**	05	−07	03	−08	−04	69	2.45	1.24
父8Ab6	憂うつな気持ちになる	**80**	−07	05	−02	09	−05	63	1.95	1.05
父54Ac2	父親が年をとったことを認めたくないと思う	**65**	16	02	−14	−12	07	57	1.97	1.02
父14Ac4	父親が年をとることに抵抗を感じる	**60**	09	13	−04	−12	04	54	2.17	1.04
父50Ac3	父親が年をとることについて考えたくない	**46**	−07	15	07	−06	14	35	2.16	1.06
f-f2	**老いた父親へのいたわり**（α＝.88）									
父34Pa1	父親に優しくしようと思う	−14	**80**	01	06	−01	−04	67	3.99	0.85
父23Pa4	父親を大切にしようと思う	01	**76**	−09	−02	15	−01	65	4.12	0.85
父42Pa6	父親孝行しようと思う	05	**76**	−21	−08	09	01	62	4.15	0.89
父39Pa3	父親に感謝の気持ちを持ちたいと思う	04	**75**	−25	05	07	−04	70	4.23	0.81
父33Pa7	父親に楽をさせてあげたいと思う	−07	**70**	20	16	04	−10	64	3.71	1.06
父25Pa5	父親を支えたいと思う	−01	**69**	03	10	01	06	60	3.63	1.06
父11Pa2	なるべく父親と一緒にいようと思う	04	**69**	11	−21	−14	20	45	2.78	1.11
父36Pb4	父親にはいつまでも若々しくいてほしいと思う	25	**52**	02	−25	08	19	36	3.34	1.23
父37Pb3	父親にはいつまでも健康でいてほしいと思う	01	**49**	−15	05	06	00	31	4.57	0.61
父31Sc4	父親のそばで就職しようかどうか悩む	00	**49**	25	−15	−16	02	24	2.25	1.07
父20Pb6	今後の父親の健康を心配する	07	**48**	−01	19	01	−04	37	4.27	0.81
父30Pb7	父親の体力が衰えていくのではないかと心配する	22	38	18	20	11	−20	40	3.76	1.12
f-f3	**父親の老いがもたらす負担への懸念**（α＝.88）									
父29Sc7	父親の老後の金銭面について、私が負担しなければならないのかと心配する	−11	−02	**84**	−04	06	00	61	2.12	1.11
父28Pb2	父親の老後の経済的な心配をする	−12	19	**78**	09	05	−14	59	2.65	1.29
父53Sc5	父親が年をとっていくことで私のしたいことができないのではないかと感じる	−03	−09	**74**	−07	−06	07	55	1.89	0.97
父6Ac5	父親が年をとることが厄介なことだと感じる	−09	−20	**72**	−11	04	03	62	1.86	0.99
父44Sc6	父親からの経済的な援助が期待できなくなることを心配する	−02	−10	**70**	03	07	−05	49	2.26	1.20
父32Ac7	父親のことが重荷になると思う	08	−22	**69**	02	03	07	59	1.85	0.94
父4Sc2	私の将来に不安を感じる	−02	22	**65**	−12	−11	08	45	2.63	1.25
父24Ac6	父親が年をとったことで私に迷惑をかけてほしくない	13	**−46**	**56**	06	14	08	54	1.87	0.94
父27Pb1	父親の老後の生活が心配になる	10	37	**55**	05	00	−04	52	3.34	1.26
父43Pb5	父親が老後をどのように過ごすか心配になる	11	33	**46**	18	−05	−09	48	3.35	1.20
f-f4	**老いた父親からの自立志向**（α＝.89）									
父38Sb5	父親に頼らないようにしようと思う	01	−12	−03	**94**	−02	−05	72	3.79	1.00
父40Sb7	父親に甘えないようにしようと思う	−01	−10	−02	**83**	−04	−06	55	3.79	0.97
父15Sb6	自分でできることは父親にしてもらわず，自分でしようと思う	−08	08	−04	**74**	06	04	68	4.13	0.93
父17Sb2	自分がしっかりしなくてはいけないと思う	12	07	−03	**61**	04	22	61	3.99	1.01
父13Sb4	自分の身の回りのことは自分でしようと思う	−06	16	−05	**58**	03	05	50	4.01	0.99
父10Sb1	早く経済的に自立しようと思う	01	12	03	**56**	−07	13	45	4.06	1.05
父35Sb3	父親に迷惑をかけないようにしようと思う	−09	**41**	−01	**52**	−08	−01	61	4.05	0.96
父3Sc1	私の将来のことを考えなければならないと思う	−02	15	08	**47**	−10	24	46	4.04	1.01
父55Sc3	いつまでも父親がいるわけではないと感じる	13	−10	21	31	02	09	21	3.46	1.23
f-f5	**父親の老いの自然視**（α＝.89）									
父47Aa1	父親が年をとることは自然なことだと思う	−03	−02	00	04	**91**	04	87	4.56	0.55
父48Aa2	父親が年をとることは仕方がないことだと思う	03	11	05	−13	**89**	00	74	4.49	0.58
父45Aa4	父親が年をとるということは当たり前のことだと思う	−12	−10	05	07	**80**	06	73	4.49	0.63
父26Aa5	父親も人間なので年をとるものだと思う	04	12	−01	−13	**79**	−01	60	4.55	0.64
父46Aa7	父親が年をとることを受けとめていこうと思う	02	10	06	13	**57**	03	45	4.32	0.79
父49Aa3	父親が年をとることは気にすることではないと思う	−33	−02	15	−07	36	04	26	3.79	1.13
父52Aa6	父親が年をとっても父親であることにかわりはないと思う	05	24	−15	11	31	00	29	4.56	0.76
f-f6	**父親の老いにともなう自己成長感**（α＝.77）									
父18Sa2	自分が大人になったと感じる	01	−04	−12	01	03	**86**	74	3.24	1.12
父16Sa5	自分が成長したと感じる	−07	11	−11	−08	10	**81**	72	3.18	1.02
父1Sa4	私も年をとったと感じる	−12	11	08	02	02	**60**	43	3.09	1.28
父2Sa6	私はもう子供ではないと感じる	07	−04	−12	40	−09	**46**	45	3.56	1.10
父7Sa3	私が父親の立場に近づいていると感じる	06	−08	14	13	03	**42**	26	2.39	1.23
父41Sa1	父親と子ではなく，ひとりの人間として付き合おうと思う	10	−07	14	09	01	38	22	2.87	1.17
父5Sa7	私と父親が対等な関係であると感じる	−02	06	30	00	−01	37	24	2.28	1.12
因子間相関	f-f1　父親の老いへの悲哀	f1	f2	f3	f4	f5	f6			
	f-f2　老いた父親へのいたわり	15								
	f-f3　父親の老いがもたらす負担への懸念	50	−02							
	f-f4　老いた父親から自立志向	01	54	16						
	f-f5　父親の老いの自然視	−33	27	−15	40					
	f-f6　父親の老いにともなう自己成長感	08	27	06	38	16				

注１：項目番号につけられているアルファベットは，類似の内容を整理する段階でつけられたものである。
注２：因子負荷量と共通性（h^2），因子間相関の小数点は省略した。枠で囲まれた因子負荷量は，各因子に対して，.40以上の負荷を示したものである。
注３：α係数は，各因子に単独で.40以上の負荷量を示した項目のみを用いて算出した。用いた項目の項目番号を枠で囲んだ。
注４：142名の「まったくあてはまらない（１点）」から「非常にあてはまる（５点）」までの5件法による回答について分析した。

抽出された各因子は，以下のように解釈された。

第1因子に高い負荷量を示した項目の多くは，母親の第1因子である「母親の老いへの悲哀」との対応がみられた。そのため，この第1因子は，「父親の老いへの悲哀」と解釈された。

第2因子に高い負荷量を示した項目の多くは，母親の第2因子である「老いた母親へのいたわり」との対応がみられた。そのため，この第2因子は，「老いた父親へのいたわり」と解釈された。

第3因子に高い負荷量を示した項目の多くは，母親の第3因子である「母親の老いがもたらす負担への懸念」との対応がみられた。そのため，この第3因子は，「父親の老いがもたらす負担への懸念」と解釈された。

第4因子に.40以上の高い負荷量を示した項目のほとんどは，「Sb）自立したいという気持ち」として作成された項目であった。各項目は，母親の第7因子である「老いた母親からの自立志向」との対応もみられた。そのため，この第4因子は，「老いた父親からの自立志向」と解釈された。

第5因子に.40以上の高い負荷量を示した項目は，すべて「Aa）親の老いは自然なことだという気持ち」として作成された項目であった。各項目は，母親の第6因子である「母親の老いの自然視」との対応もみられた。そのため，この第6因子は，「父親の老いの自然視」と解釈された。

第6因子に.40以上の高い負荷量を示した項目は，すべて「Sa）自分の成長に気づくきっかけ」として作成された項目であった。各項目は，母親の第4因子である「母親の老いにともなう自己成長感」との対応もみられた。そのため，この第6因子は，「父親の老いにともなう自己成長感」と解釈された。

以上のように，大学生における母親の老いの認知によって生じる気持ちとして，「母親の老いへの悲哀」，「老いた母親へのいたわり」，「母親の老いがもたらす負担への懸念」，「母親の老いにともなう自己成長感」，「母親の老後の生活の心配」，「母親の老いの自然視」，「老いた母親からの自立志向」という7種類の気持ちが抽出された。大学生における父親の老いの認知によって生じる気持ちとして，「父親の老いへの悲哀」，「老いた父親へのいたわり」，「父親の老いがもたらす負担への懸念」，「老いた父親からの自立志向」，「父親の老いの自然視」，「父親の老いにともなう自己成長感」という6種類の気持ちが抽出された。

2．親の老いの認知によって生じる気持ちの組み合わせからみた状態像

親の老いの認知によって生じる気持ちとして抽出された各因子に，単独で.40以上の負荷量を示した質問項目のみを用いて平均得点を算出した。それと同一の項目を用いて，親の老いの認知によって生じるそれぞれの気持ちについてα係数を求めた。その結果，母親の老いの認知によって生じる7種類の気持ちでは.72から.95のα係数が得られ（Table 4参照），父親の老いの認知によって生じる6種類の気持ちでは.77から.95のα係数が得られた（Table 5参照）。したがって，母親の老いの認知によって生じる7種類の気持ちと父親の老いの認知によって生じる6種類の気持ちについて，それぞれ一定水準の内的整合性があると判断した。

上記のように算出された平均得点を投入変数にしたk平均法によるクラスター分析を行い，調査回答者を分類した。各クラスターの人数と特徴から，それぞれ以下のクラスター数による分類を採択した。分類されたクラスター群を独立変数に，投入変数の各平均得点と親の老いを認知している程度とを従属変数にした多重比較の結果を，母親についてはTable 6に，父親についてはTable 7に示した。

母親の老いの認知によって生じる気持ちについては，4クラスターによる分類を採択した。

第1クラスターは，母親の老いの認知によって生じるほとんどの気持ちの得点が全体の中で小さかった。これは，母親は年をとったとは思っていても，そのことで特に何かを感じてはいないという状態であると考えられた。そのため，第1クラスターは，「母親の老いに無関心な状態（無関心）」と解釈された。

第2クラスターは，「m-f1母親の老いへの悲哀」と「m-f2老いた母親へのいたわり」の得点は全体の中で大きいが，「m-f7老いた母親からの自立志向」の得点は全体の中で小さかった。さらに，「m-f5母親の老後の生活の心配」の得点は，第4クラスターより小さかったが，第1クラスターと第3クラスターよりは大きかった。これは，母親から自立しようとする気持ちは小さく，そのように密着した関係の中で母親の老いに悲哀やいたわりを感じながら，母親を心配している状態であると考えられた。そのため，第2クラスターは「母親の老いを心配している状態（心配）」と解釈された。

第3クラスターは，「m-f1母親の老いへの悲哀」と「m-f3母親の老いがもたらす負担への懸念」の得点が全体の中で小さく，「m-f7老いた母親からの自立志向」，「m-f6母親の老いの自然視」の得点が全体

Table 6　大学生における母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像の特徴

クラスター番号	1	2	3	4	多重比較の結果
	(n =151)	(n =25)	(n =37)	(n =56)	(n =33)	
m-f1 母親の老いへの悲哀	1.62(0.42)	3.30(0.84)	1.92(0.61)	3.11(0.71)	1=3<4=2
m-f3 母親の老いがもたらす負担への懸念	1.60(0.55)	1.94(0.57)	1.64(0.50)	2.67(0.67)	1=2=3<4
m-f5 母親の老後の生活の心配	2.16(0.54)	3.46(0.54)	2.99(0.68)	3.90(0.53)	1<3<2<4
m-f2 老いた母親へのいたわり	3.96(0.87)	4.36(0.43)	4.28(0.57)	4.34(0.43)	1<2
m-f4 母親の老いにともなう自己成長感	2.93(0.82)	3.28(0.79)	3.19(0.79)	3.31(0.71)	n.s.
m-f7 老いた母親からの自立志向	2.66(0.54)	2.78(0.69)	4.26(0.57)	4.20(0.48)	1=2<4=3
m-f6 母親の老いの自然視	4.41(0.59)	4.26(0.46)	4.72(0.31)	4.33(0.48)	2=4=1<3
母親の老いを認知している程度	2.72(0.68)	2.95(0.58)	2.88(0.66)	3.15(0.71)	n.s.
母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像	無関心	心配	受容	動揺	

注1：クラスター番号と人数以外の数字は，平均得点（*SD*）である。
注2：母親の老いの認知によって生じる7種類の気持ちの得点範囲は，1.00から5.00までであり，理論的中間値である3.00より大きいものを網掛けした。なお，母親の老いを認知している程度の得点範囲は，1.00から4.00までであった。
注3：各変数において得点が最大のものは太線で囲み，得点が最小のものは破線で囲んだ。なお，各変数は，多重比較の結果をもとに順序を並び替えている。

Table 7　大学生における父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像の特徴

クラスター番号	1	2	3	多重比較の結果
	(n =142)	(n =47)	(n =45)	(n =50)	
f-f1 父親の老いへの悲哀	1.49(0.46)	3.11(0.73)	2.00(0.72)	1<3<2
f-f3 父親の老いがもたらす負担への懸念	2.07(0.66)	3.06(0.72)	2.23(0.72)	1=3<2
f-f2 老いた父親へのいたわり	3.91(0.62)	4.06(0.44)	3.26(0.56)	3<1=2
f-f6 父親の老いにともなう自己成長感	3.51(0.74)	3.24(0.77)	2.23(0.61)	3<2=1
f-f4 老いた父親からの自立志向	4.42(0.44)	4.25(0.46)	3.29(0.81)	3<2=1
f-f5 父親の老いの自然視	4.86(0.26)	4.38(0.52)	4.23(0.56)	3=2<1
父親の老いを認知している程度	3.15(0.69)	3.36(0.71)	2.82(0.72)	3<2
父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像	受容	動揺	無関心	

注1：クラスター番号と人数以外の数字は，平均得点（*SD*）である。
注2：父親の老いの認知によって生じる6種類の気持ちの得点範囲は，1.00から5.00までであり，理論的中間値である3.00より大きいものを網掛けした。なお，父親の老いを認知している程度の得点範囲は，1.00から4.00までであった。
注3：各変数において得点が最大のものは太線で囲み，得点が最小のものは破線で囲んだ。なお，各変数は，多重比較の結果をもとに順序を並び替えている。

の中で大きかった。これは，母親が年をとることは自然なことであると受容し，そのように年をとった母親から自立していこうとしている状態であると考えられた。そのため，第3クラスターは「母親の老いを受容している状態（受容）」と解釈された。

第4クラスターは，「m-f1母親の老いへの悲哀」，「m-f3母親の老いがもたらす負担への懸念」，「m-f5母親の老後の生活の心配」と共に「m-f7老いた母親からの自立志向」の得点も全体の中で大きかった。これは，母親が年をとったことに悲哀を感じ，今後の自分や母親の生活に不安を感じているが，だからこそ母親から自立しようともしており，心理的に揺れ動いている状態であると考えられた。そのため，第4クラスターは「母親の老いに動揺している状態（動揺）」と解釈された。

なお，4クラスター間で，母親の老いを認知している程度に差はみられなかった。

父親の老いの認知によって生じる気持ちについては，3クラスターによる分類を採択した。

第1クラスターは，「f-f1父親の老いへの悲哀」と「f-f3父親の老いがもたらす負担への懸念」の得点が全体の中で小さく，「f-f2老いた父親へのいたわり」，

「f-f6父親の老いにともなう自己成長感」,「f-f4老いた父親からの自立志向」,「f-f5父親の老いの自然視」の得点が全体の中で大きく，母親の第3クラスターである「母親の老いを受容している状態」と対応していると考えられた。そのため，第1クラスターは「父親の老いを受容している状態（受容）」と解釈された。

第2クラスターは,「f-f1父親の老いへの悲哀」,「f-f3父親の老いがもたらす負担への懸念」と共に「f-f2老いた父親へのいたわり」,「f-f6父親の老いにともなう自己成長感」,「f-f4老いた父親からの自立志向」の得点も全体の中で大きく，母親の第4クラスターである「母親の老いに動揺している状態」と対応していると考えられた。そのため，第2クラスターは「父親の老いに動揺している状態（動揺）」と解釈された。

第3クラスターは，父親の老いの認知によって生じるほとんどの気持ちの得点が全体の中で小さく，母親の第1クラスターである「母親の老いに無関心な状態」と対応していると考えられた。そのため，第3クラスターは「父親の老いに無関心な状態（無関心）」と解釈された。

なお，3クラスター間で，父親の老いを認知している程度に差がみられた（$F(2, 139)=6.96$, $p<.01$）。多重比較の結果,「父親の老いに無関心な状態」にある大学生は,「父親の老いに動揺している状態」にある大学生よりも，父親の老いを認知している程度が小さかった。

さらに，母親の老い認知によって生じる気持ちの状態像と，父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像についてχ^2検定を行なった（Table 8）。その結果，有意な人数比率の偏りがみられた（$\chi^2(6)=74.79$, $p<.001$）。母親と父親で対応していると考えられた親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像を，母親と父親の双方に示す大学生が多くみられた。また,「母親の老いを心配している状態」にある大学生は,「父親の老いを受容している状態」は少なく,「父親の老いに動揺している状態」を多く示した。

3．親の老いの認知によって生じる気持ちの男女差からみた特徴

初めに，親の老いを認知している程度について，子である大学生の性別（男性・女性）と親の性別（父親・母親）を要因とした分散分析を行った。その結果，親の性別の主効果のみがみられた（$F(1, 149)=4.34$, $p<.05$）。大学生は，母親よりも父親の老いを強く認知していた。

続いて，親の老いの認知によって生じる気持ちについて，性別（男性・女性）を要因としたt検定を行なった。男性は女性よりも「m-f7老いた母親からの自立志向」を感じていた（$t(148)=3.17$, $p<.01$）。女性は男性よりも「f-f2老いた父親へのいたわり」を感じていた（$t(141)=2.28$, $p<.05$）。先に述べた分散分析の結果と，t検定の結果をTable 9に整理した。

さらに，親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像と性別（男性・女性）によるχ^2検定を行なった。その結果，母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像には，有意な人数比率の偏りがみられた（$\chi^2(3)=9.40$, $p<.05$）。男性よりも女性で「母親の老いを心配している状態」がみられ，女性よりも男性で「母親の老いを受容している状態」がみられた（Table10）。父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像には，有意な人数比率の偏りはみられなかった（Table11）。

Table 8　母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像と父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像との人数比

父親＼母親	1 無関心	2 心配	3 受容	4 動揺	合計
1 受容	11(8.2%)	4(6.0%)	29(21.6%)	2(1.5%)	46(34.3%)
	1.1	**−2.7**	4.8	**−3.7**	
2 動揺	1(0.7%)	15(11.2%)	2(1.5%)	26(19.4%)	44(32.8%)
	−3.4	2.3	**−5.3**	6.9	
3 無関心	13(9.7%)	11(8.2%)	17(12.7%)	3(2.2%)	44(32.8%)
	2.3	0.5	0.5	**−3.1**	
合計	25(18.7%)	30(22.4%)	48(35.8%)	31(23.1%)	134(100.0%)

注1：数字の上段は人数（全体での人数比），下段は調整された残差である。
注2：調整された残差≧｜2.0｜で，度数が期待度数以上の場合は□で，期待度数以下の場合は■で示した。

Table 9　親の老いの認知によって生じる気持ちの男女による得点差

	男性	女性	
母親の老いを認知している程度	2.87(0.79)	2.75(0.84)	母親＜父親
父親の老いを認知している程度	2.96(0.96)	2.96(0.81)	
m-f1 母親の老いへの悲哀	2.46(0.98)	2.49(0.96)	
m-f2 老いた母親へのいたわり	4.19(0.56)	4.32(0.61)	
m-f3 母親の老いがもたらす負担への懸念	2.00(0.79)	1.85(0.57)	
m-f4 母親の老いにともなう自己成長感	3.13(0.78)	3.23(0.77)	
m-f5 母親の老後の生活の心配	3.13(0.80)	3.19(0.84)	
m-f6 母親の老いの自然視	4.50(0.46)	4.44(0.50)	
m-f7 老いた母親からの自立志向	3.85(0.90)	3.37(0.92)	男性＞女性
f-f1 父親の老いへの悲哀	2.25(0.98)	2.17(0.90)	
f-f2 老いた父親へのいたわり	3.61(0.67)	3.85(0.61)	男性＜女性
f-f3 父親の老いがもたらす負担への懸念	2.54(0.80)	2.33(0.82)	
f-f4 老いた父親からの自立志向	4.08(0.73)	3.86(0.80)	
f-f5 父親の老いの自然視	4.47(0.52)	4.49(0.55)	
f-f6 父親の老いにともなう自己成長感	3.09(0.99)	2.89(0.77)	

注１：親の老いを認知している程度の得点範囲は，1.00から4.00までであり，子の性別と親の性別を要因とした分散分析を行った。
注２：親の老いの認知によって生じる気持ちの得点範囲は，1.00から5.00までであり，t検定を行なった。

Table 10　母親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像の男女による人数比

	1 無関心	2 心配	3 受容	4 動揺	合計
男性	10(13.3%)	12(16.0%)	34(45.3%)	19(25.3%)	75(100.0%)
	−1.1	**−2.5**	2.2	1.0	
女性	15(20.0%)	25(33.3%)	21(28.0%)	14(18.7%)	75(100.0%)
	1.1	2.5	**−2.2**	−1.0	
全体	25(16.7%)	37(24.7%)	55(36.9%)	33(22.0%)	150(100.0%)

注１：数字の上段は人数（性別での人数比），下段は調整された残差である。
注２：調整された残差≧｜2.0｜で，度数が期待度数以上の場合は□で，期待度数以下の場合は■で示した。

Table 11　父親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像の男女による人数比

	1 受容	2 動揺	3 無関心	合計
男性	25(36.2%)	21(30.4%)	23(33.3%)	69(100.0%)
	0.7	−0.4	−0.3	
女性	22(30.6%)	24(33.3%)	26(36.1%)	72(100.0%)
	−0.7	0.4	0.3	
全体	47(33.3%)	45(31.9%)	49(34.8%)	141(100.0%)

注１：数字の上段は人数（性別での人数比），下段は調整された残差である。

考　察

本研究の結果を，3つの目的に対応してまとめた。

（1）大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちとして，「親の老いへの悲哀」，「老いた親へのいたわり」，「親の老いがもたらす負担への懸念」，「親の老いにともなう自己成長感」，「親の老いの自然視」，「老いた親からの自立志向」が，母親と父親で共に抽出された。さらに，母親では，「母親の老後の生活の心配」が抽出された。

（2）親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像として，「親の老いを受容している状態」，「親の老いに動揺している状態」，「親の老いに無関心な状態」が，母親と父親で共に見出された。さらに，母親では，「母親の老いを心配している状態」も見出された。

（3）男性よりも女性で母親の老いを心配している状態が多くみられ，女性よりも男性で母親の老いを受容している状態が多くみられた。

（1）と（2）で述べたように，親の老いの認知によって生じる気持ちと，その状態像には，母親と父親で共通した点も多いが，異なる点もみられた。具体的には，母親の老いの認知によって生じる気持ちでのみ「母親の老後の生活の心配」が抽出され，「母親の老いを心配している状態」という状態像が見出された。この結果は，西田（2000）が述べるように，大学生にとって母親は父親よりも身近な存在になりやすいため，母親の老後の生活について心配する気持ちがより明確に抽出されたと考えられる。あるいは，「母親の老後の生活の心配」には，経済的な心配や金銭面に関する項目もみられたことから，父親に比べて母親は就労する機会が少ないという社会的状況が反映された可能性も指摘できる。

（3）で述べたように，男性よりも女性で母親の老いを心配している状態が多くみられ，女性よりも男性で母親の老いを受容している状態がみられた。塩田（2000）は，娘が母親の介護の担い手になりやすいという社会的状況を指摘している。そのような社会的状況から，男性よりも女性で母親の老いを心配している状態がみられやすく，男性は女性に比べて親の介護の担い手になるという意識が低いため，母親の老いを受容しやすいのではないかと考えられる。また，「母親の老いを心配している状態」は，「老いた母親からの自立志向」の得点が小さく，母親との密着した関係になりやすいと考えられた。そこでは，塩田（2000）が論じるように「母と娘の開かれた関係」が重要になるといえる。

このような男女差という観点からの検討に加え，大野（1998）が指摘する個人差という観点からも，親の老いの認知によって生じる気持ちについて検討する必要がある。具体的には，息子と娘，母親と父親という単なる男女による違いだけではなく，長子，末子，あるいは一人っ子という続柄によって，親が老いることの意味あいは異なると予想される。また，親と同居して毎日会っている大学生よりも，一人暮らしをしていて，たまに実家に帰省した際に親の老いを認知する大学生の方が，その影響は大きいと考えられる。本研究では，9割以上の大学生が親の老いを認知していたが，一人暮らしの学生が多い大学での調査であったことが結果に影響している可能性もある。さらに，これまで親とどのような関係を築いてきて，将来的に親とどのようにかかわっていこうとしているのかという親子関係の背景も関係することが予想される。

本研究では，（2）で述べたように，親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像が見出された。その中でも，「親の老いを受容している状態」と「親の老いに動揺している状態」では，母親と父親で共に，「老いた親へのいたわり」，「親の老いにともなう自己成長感」，「老いた親からの自立志向」の得点が，理論的中間値である3.00を超えていた。したがって，親の老いを受容している状態や，親の老いに動揺している状態にある大学生は，自分自身の成長も実感し，年をとった親をいたわると共に，そのような親から自立して，親との新しい関係を築いていこうとしていると考えられた。西平（1990）や落合（1995）は，青年の心理的離乳と親の老いの認知との関係を論じている。したがって，青年が発達していく中で，親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像も変化していくことが予想される。例えば，「親の老いに動揺している状態」にある青年が親との新しい関係を築いていくことで，親の老いは悲哀や負担への懸念をもたらすものではなくなり，「親の老いを受容している状態」に至るという変化も考えられる。

以上より，親の老いの認知によって生じる気持ちについて，次のようにまとめる。青年にとって親が老いることは，無関心なことであったり，特に女性では母親の老いを心配したりすることも多くみられるが，親の老いに動揺したり，親の老いを受容したりする中で，親との新しい関係を築いていこうとすることにもつながると考えられた。

今後は，本研究で抽出された親の老いの認知によって生じる気持ちとその状態像を，男女差という観点だけではなく，個人差や発達的変化という観点

からも検討する。また，本研究では親の老いの認知を1項目のみで尋ねていた。青年が親の老いをどのように認知しているかによっても，親の老いの認知によって生じる気持ちは異なると予想される。そのような青年による親の老いの主観的な認知と共に，親の実年齢も考慮する必要がある。本研究では，大学生は母親よりも父親の老いを強く認知していることが示されたが，この結果は母親よりも父親の実年齢が高いことによる可能性もある。さらに，中年期における親の老いの認知によって生じる気持ちの検討という生涯発達的な展開も考えられる。そこでは，親子の共変関係（平石，1995；久世・平石，1992）が指摘されるように，青年と親の双方の発達的変化における相互作用を解明することが課題である。

要　約

本研究の目的は，大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちについて明らかにすることである。親の老いの認知によって生じる気持ちを尋ねる55項目を作成し，大学生162名に質問紙調査を実施した。その結果，次の3点が示された。①大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちとして，「親の老いへの悲哀」，「老いた親へのいたわり」，「親の老いがもたらす負担への懸念」，「親の老いにともなう自己成長感」，「親の老いの自然視」，「老いた親からの自立志向」が，母親と父親で共に抽出された。さらに，母親では，「母親の老後の生活の心配」が抽出された。②親の老いの認知によって生じる気持ちの状態像として，「親の老いを受容している状態」，「親の老いに動揺している状態」，「親の老いに無関心な状態」が，母親と父親で共に見出された。さらに，母親では，「母親の老いを心配している状態」も見出された。③男性よりも女性で「母親の老いを心配している状態」が多くみられ，女性よりも男性で「母親の老いを受容している状態」が多くみられた。以上の結果から，青年にとって親が老いることは，無関心なことであったり，特に女性では母親の老いを心配したりすることも多くみられるが，親の老いに動揺したり，親の老いを受容したりする中で，親との新しい関係を築いていこうとすることにもつながると考えられた。

引用文献

平石賢二（1995）．青年期の異性代関係－相互性の観点から　落合良行・楠見　孝（責任編集）講座　生涯発達の心理学　4　自己への問い直し－青年期　金子書房　pp.125-154.

池上研司（1997）．老年期と不安（1）親の老いに感じる「老醜」の不安　公評，**34**，93-97.

河合隼雄（1980）．家族関係を考える　講談社

小高　恵（2000）．親-青年関係尺度の作成の試み　南大阪大学紀要，**3**(1)，87-96.

国谷誠朗（1989）．向親期の家族過程と危機　内山喜久雄・筒井末春・上里一郎（監）岡堂哲雄（編）メンタルヘルス・シリーズ　家族関係の発達と危機　同胞舎　pp.197-226.

久世敏雄・平石賢二（1992）．青年期の親子関係研究の展望　名古屋大學教育學部紀要－教育心理学科－，**39**，77-88.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）．日本国語大辞典　第二版　第二巻　小学館

西田裕紀子（2000）．母子関係　久世敏雄・齋藤耕二（監修）福富　護・二宮克己・高木秀明・大野　久・白井利明（編）青年心理学事典　福村出版　p.248.

西平直喜（1990）．成人（おとな）になること－生育史心理学から　東京大学出版会

野末武義（1996）．親密さのパラドックス－成人期から中年期における両親との親密性と自己分化　現代のエスプリ，**353**，69-79.

落合良行（1995）．心理的離乳への5段階過程仮説　筑波大学心理学研究，**17**，51-59.

岡本清孝・上地安昭（1999）．第二の個体化からみた親子関係および友人関係　教育心理学研究，**47**，248-258.

岡本祐子（2002）．アイデンティティの生涯発達と心理臨床　岡本祐子（編著）アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房　pp.151-181.

大野祥子（1998）．父親であること　柏木惠子（編）結婚・家族の心理学－家族の発達・個人の発達－　ミネルヴァ書房　pp.149-184.

長田久雄（2005）．老親の介護・看取りをめぐる問題　岡本祐子（編）シリーズ　こころとからだの処方箋　3　成人期の危機と心理臨床－壮年期に灯る危険信号とその援助－ゆまに書房　pp.215-238.

Rabin, C., Bressler, Y., & Prager, E. (1993). Caregiver burden and personal authority: Differentiation and connection in caring for an elderly parent. *American journal of family therapy*, 21, 27-39.

新村　出（編）（1998）．広辞苑　第五版　岩波書店
塩田祥子（2000）．老親介護からみる「母－娘」関係のあり方についての一考察－援助の実践に向けて－　皇学館大学社会福祉学部紀要，**3**，73-81.
若本純子・無藤　隆（2006）．中高年期における主観的老いの経験　発達心理学研究，**17**，84-93.
山田忠雄・柴田　武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（編）（2005）．新明解国語辞典　第六版　三省堂

謝　辞

本研究は，授業として行われた実習での共同研究を再分析し，改めて論文として再構成したものです（講義名：心理学研究法［平成17年度］）。筑波大学人間学類（当時）長谷川仁美氏，伊藤由美子氏，長澤志穂氏に感謝いたします。あわせて，調査にご協力くださった皆様に心よりお礼申し上げます。

（受稿9月28日：受理11月8日）